

熊谷市立江南文化財センター テーマ展

熊谷地域のうちわ展

会期：令和7年1月6日（月）～6月30日（月）

会場：熊谷市立江南文化財センター ホール展示ケース



1 はじめに

今回の展示は、昭和20年代から30年代にかけて熊谷地域の商店で配られていた「うちわ」を展示します。

レトロなイラストが描かれた「うちわ」は、昭和世代にとっては懐かしく、また当時の様子を知らない世代にとっては、当時の様子がうかがえる貴重な歴史資料となります。

2 うちわの歴史

うちわの原型は、紀元前3世紀の中国の周で使われた「翳（さしば）」とされています。

翳（さしば）は、柄が長く、扇面にあたる部分は鳥の羽などから作られ、身分の高い人が、顔を隠すための道具として用いられました。その後、「はらう」「かざす」ためのものとして、儀式、祈願、威儀、占いなどに用いられました。

日本には、古墳時代に中国から伝わり、埴輪としても作られ、古墳に配置されています。

平安時代には、貴族の間で涼をとったり、陽射しを遮るために顔を隠したりするものとして用いられ、10世紀頃から、小形の翳（さしば）を「うちわ」と呼ぶようになりました。

万葉集にも「渋谷の二上山に鷲ぞ子生といふ 翳（さしば）にも君が御為に鷲ぞ子生といふ」（巻16-3882）：「渋谷の二上山に鷲が子を産むと言う。貴君のために翳（さしば）に使ってもらおうと鷲が子を産むと言う」と歌われています。

江戸時代には、浜松商人が興して江戸で開業した「伊波仙」が、豊国、国芳、広重などの版元となり、浮世絵をうちわに刷り込むことを考案し、人気を博しました。

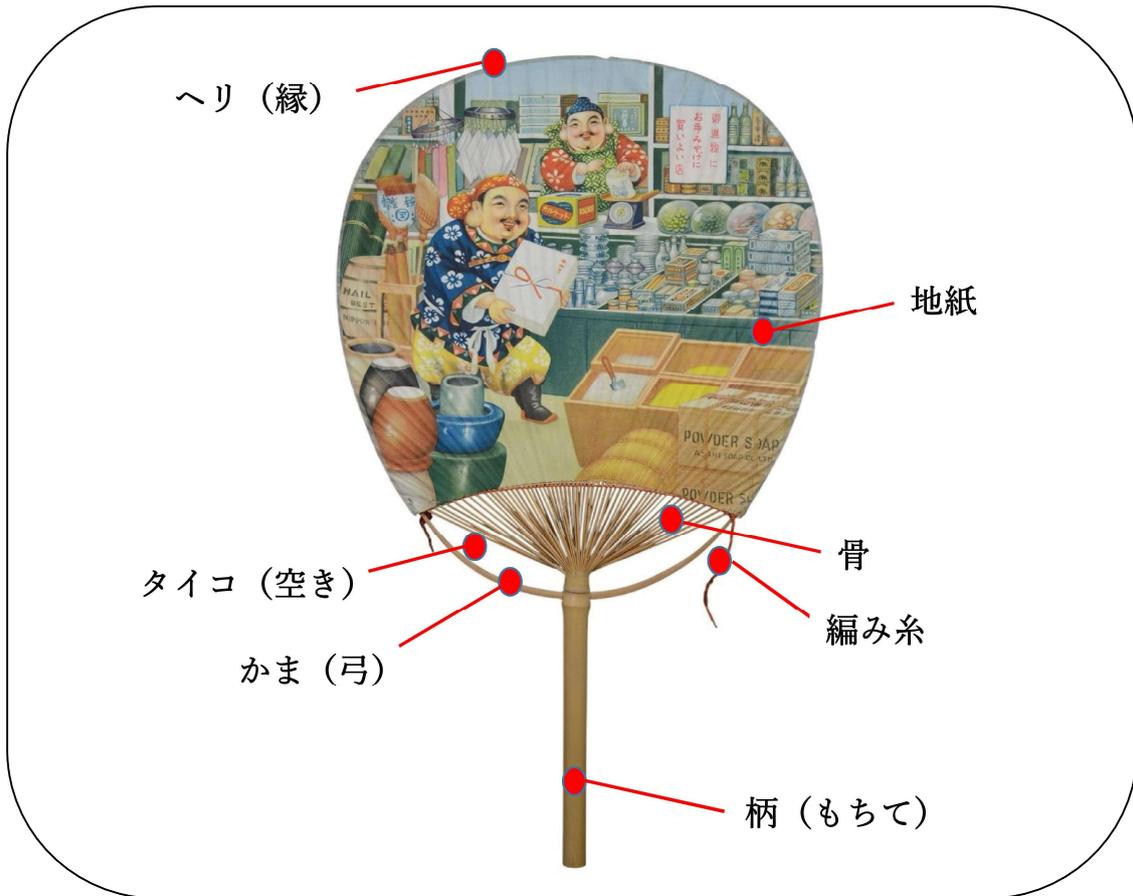
明治時代になると、広告媒体として用いることが普及し、企業や寺社によって利用されました。

熊谷の「うちわ祭り」で配られるうちわは、明治35年頃より、料亭「泉州楼」の主人が、それまでの「赤飯ふるまい」から、江戸から買い入れた渋うちわを配布したことに由来するとされています。



翳（さしば）形埴輪
円山古墳群第2号墳出土

3 うちわの部位の名称



4 日本三大うちわ

うちわの生産地として有名な香川：丸亀うちわ、京都：京うちわ、千葉：房州うちわで生産されているうちわは、「日本三大うちわ」として日本の伝統工芸品に指定されています。

○丸亀うちわ：香川県丸亀市を中心として生産されているうちわ。金刀比羅宮参拝の土産物として江戸時代初頭から生産が始まり、うちわの持ち手と扇面が一本の竹から作られているのが特徴。当時財政的に苦しかった丸亀藩が、生産を奨励し、下級武士や町民にうちわ作りが広まっていった。現在では、日本のうちわ生産の90%を生産している。

○京うちわ：京都市・南丹市を中心として生産されているうちわ。「都うちわ」「御所うちわ」とも呼ばれ、うちわの中骨と柄が分かれている「挿し柄」と呼ばれる構造が特徴。南北朝期に朝鮮から伝わった系統のうちわが起源と考えられている。柄には竹だけでなく、杉が使用されたもの、漆塗りなどの高級品も作られている。

○房州うちわ：千葉県館山市・南房総市を中心として生産されているうちわ。持ち手の部分に丸い竹を使用した「丸柄」と、竹を細かく裂いて紙が貼られていない部分（窓）を作る「割竹」が特徴。関東大震災で被災した東京のうちわ問屋が、「江戸うちわ」の原材料である「女竹」の生産地であった千葉県に移住したことにより急速に生産が拡大し、「江戸うちわ」は「房州うちわ」となり、技術と製法が受け継がれた。

5-1・2・8のうちわは、その特徴から「房州うちわ」と判断されます。

5 熊谷地域で配られたうちわ



1、「大里村玉作」の「須藤商店」で配られた「暑中御伺」のうちわ。須藤商店は、「醤油、味噌、雑貨、酒類、飼料、米穀」などを扱っていました。表面には、店員に扮した大黒様と大黒様が、「カルケット」と書かれた箱からビスケットを取り出し、量りの上の紙袋に小分けにしています。恵比寿様に扮した客が、のしと紅白の水引が掛けられた「贈答品」を手にして微笑んでいます。

大里村は、昭和 30 年に、市田村と吉見村が合併して誕生した村であることから、このうちわが配られた時期は、昭和 30 年代と思われます。



2、「吉見村玉作」の「須藤商店」で配られた「暑中御伺」のうちわ。須藤商店は、「米穀飼料 酒類雑貨 味噌醤油」などを扱っていました。表面には、白いL字形のカウンターの前に、ピンクのワンピースを着た女性が立ち微笑み、手には「醤油」とラベルされた一升瓶を抱えています。カウンターの上には「サイダー」「ソース」「バヤリースオレンジジュース」と水玉模様の包装紙に包まれた瓶（カルピス？）が置かれています。

吉見村は昭和 30 年に市田村と合併して大里村となっていることから、このうちわは、昭和 20 年代に配られたものと推測されます。



3、「宮本町」の「須藤金物店」で配られた「暑中御伺」のうちわ。須藤金物店は、「萬金物 はかります ものさし 小農機具」などを扱っていました。表面には、鎌と稲束を抱えてほほ笑む女性と、遠方には、牛が鋤を引いて畑を耕すイラストが描かれています。

農作業にコンバインやトラクターが普及したのは、昭和 40 年代であり、このうちわは、昭和 30 年代に配られたものと推測されます。



4、「熊谷市星川通り」の「カヌマ洋品店」で配られたうちわ。カヌマ洋品店は、「洋品、洋服、ズボン類一般」などを扱っていました。

表面には、黄色いワンピースを着て、頭に花柄のスカーフを巻いた女性が微笑んでいます。

このうちわの配られた年代は不明ですが、電話番号に市外局番・地域番号の記載がなく、個別番号のみの記載であることから昭和 30 年代と推測されます。



5、「相上」の「須藤自転車店」で配られたうちわ。

表面には、オレンジ色の自転車と乗ろうとしている女性のイラストが描かれています。自転車のフロントブレーキは、ロッド（金属棒）ブレーキです。裏面には「山口自転車特約店」「川越倉田屋支店」「販売 修理 須藤自転車店」「大里郡大里村相上」と記されています。

山口自転車は、昭和 38 年（1963）倒産しており、大里村誕生は昭和 30 年（1955）であることから、この間に配布されたものと判断されます。



6. 「筑波町」の「カネセ本店」で配られたうちわ。カネセ本店は、「鮮魚、仕出し」を行っていました。
表面には、長靴を履いたエビス様を模した店員さんが、大きなタイと伊勢海老を抱えています。
裏面には「熊谷市 電話四八八番」と記されています。
このうちわは、電話番号に市外局番・地域番号の記載がなく、個別番号のみの記載であることから昭和30年代と推測されます。



7. 「筑波町」の「カネセ本店」で配られたうちわ。カネセ本店は、「鮮魚、仕出し」を行っていました。
表面には、カーネーションを手に微笑む女性のイラストが描かれています。
裏面には「熊谷市 電話四八八番」と記されています。
このうちわは、電話番号に市外局番・地域番号の記載がなく、個別番号のみの記載であることから昭和30年代と推測されます。



8. 「本町」の「洋品の宇治」で配られたうちわ。
表面には、海でボートに乗る母娘のイラストが描かれています。
裏面には「電話五四七番」と記されており、電話番号に市外局番・地域番号の記載がなく、個別番号のみの記載であることから昭和30年代に配布されたと推測されます。



9. 市内「大橋際」の「松本肉店」で配られたうちわ。松本肉店では、「牛豚肉 とんかつ コロケ」が売られていました。
表面には、ほおずきの絵が描かれています。「印象」と書かれており、画家の名前と思われます。
裏面には「電話番号一一二九番」と記されており、イイニクと当時から語呂合わせの番号が意識されていたことがうかがえます。
このうちわは、電話番号に市外局番・地域番号の記載がなく、個別番号のみの記載であることから昭和30年代と推測されます。



10. 「高城神社西通り」の「武甲燃料」で配られた「暑中御伺ひ」うちわ。
表面には、払子（ほっす）を持った達磨大師が描かれ、「悟道」と記されています。
裏面には「電話一二五八番」と記されており、電話番号に市外局番・地域番号の記載がなく、個別番号のみの記載であることから昭和30年代に配布されたと推測されます。



令和7年1月6日発行
編集・発行：熊谷市立江南文化財センター
(熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係)



熊谷デジタルミュージアム